

# 平成27年度第1回ハタハタ資源対策協議会資料

表1 秋田県における漁獲可能量と漁獲実績の推移

単位:トン

年	沖合			沿岸			合計		
	漁獲枠	漁獲量	実績(%)	漁獲枠	漁獲量	実績(%)	漁獲枠	漁獲量	実績(%)
平成 7年	85	54	63	85	89	104	170	143	84
8年	110	86	78	110	157	143	220	243	111
9年	180	148	82	180	280	155	360	428	119
10年	300	162	54	300	438	146	600	599	100
11年	400	142	36	600	580	97	1,000	722	72
12年	400	265	66	600	902	150	1,000	1,166	117
13年	520	506	97	780	986	126	1,300	1,493	115
14年	680	384	57	1,020	1,570	154	1,700	1,954	115
15年	960	907	94	1,440	2,051	142	2,400	2,958	123
16年	1,000	707	71	1,500	2,349	157	2,500	3,055	122
17年	1,000	489	49	1,500	1,867	124	2,500	2,356	94
18年	800	944	118	1,200	1,640	137	2,000	2,584	129
19年	720	847	118	1,080	765	71	1,800	1,612	90
20年	1,200	868	72	1,800	2,035	113	3,000	2,903	97
21年	1,040	1,054	101	1,560	1,475	95	2,600	2,530	97
22年	960	457	48	1,440	1,277	89	2,400	1,734	72
23年	1,120	677	60	1,680	1,287	77	2,800	1,964	70
24年	1,080	376	35	1,620	931	57	2,700	1,307	48
25年	768	624	81	1,152	898	78	1,920	1,522	79
26年	672	285	42	1,008	940	93	1,680	1,225	73

※ 平成9年以降は、沖合は管理漁期(9月～翌6月)、沿岸は漁期(11月～翌1月)の合計値 (水産漁港課調べ)

◎H26年の配分枠に対する実績は、沖合 42 %、沿岸 93 %、全体で 73 %となった。

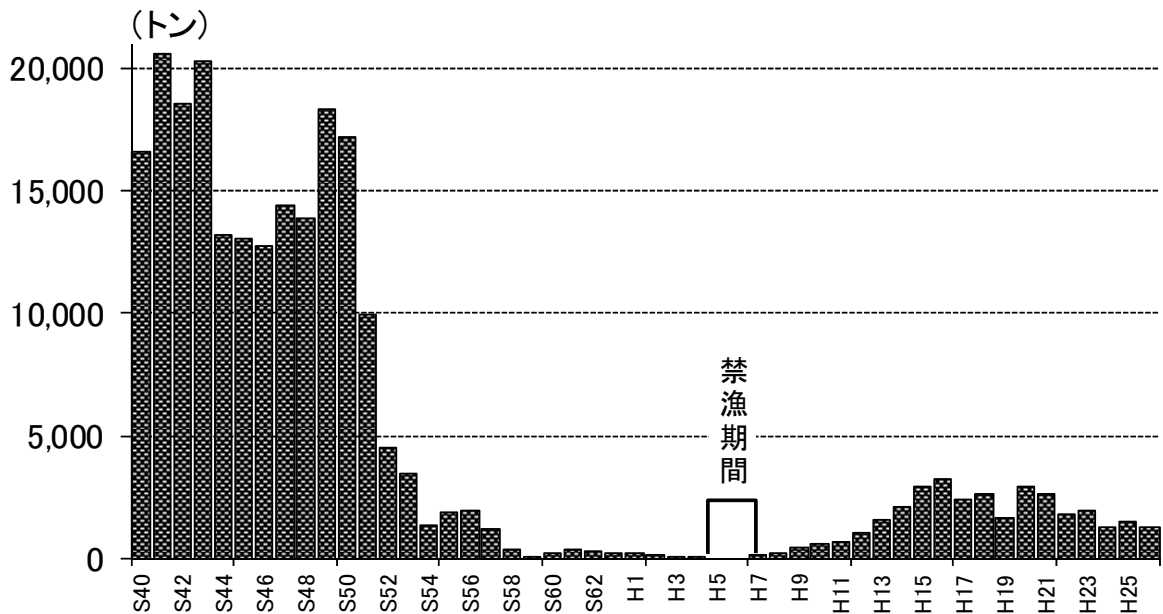


図1 秋田県におけるハタハタ漁獲量の推移

(1-12月漁獲量: H25年までは農林水産統計、H26年は水産漁港課調べ)

◎H26年の本県漁獲量は 1,265トンで、前年に比べて 約230トン減少した。

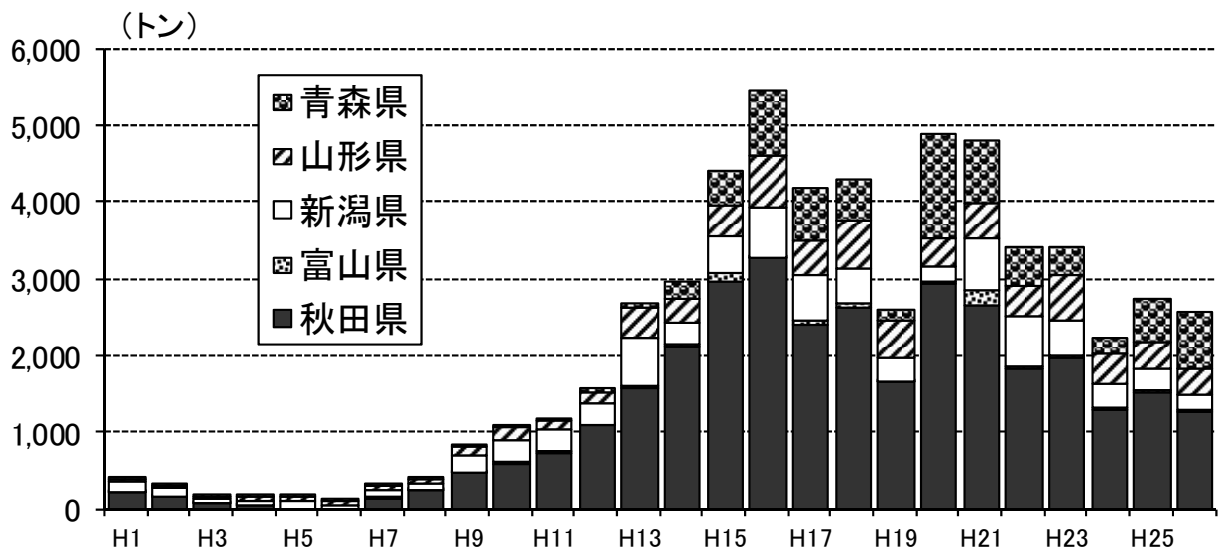


図2 日本海北部5県における漁獲量の推移 (H26年は日本海区水産研究所調べ)

- ◎H26年の5県漁獲量は2,576トンで、前年漁期より164トン減少した。
- ◎このうち秋田県の割合は49%で、前年に比べ6ポイント低下した。
- ◎県別では秋田1,265トン(前年比84%)、青森754トン(131%)、山形323トン(94%)新潟220トン(81%)、富山14トン(35%)で、青森のみ増加した。

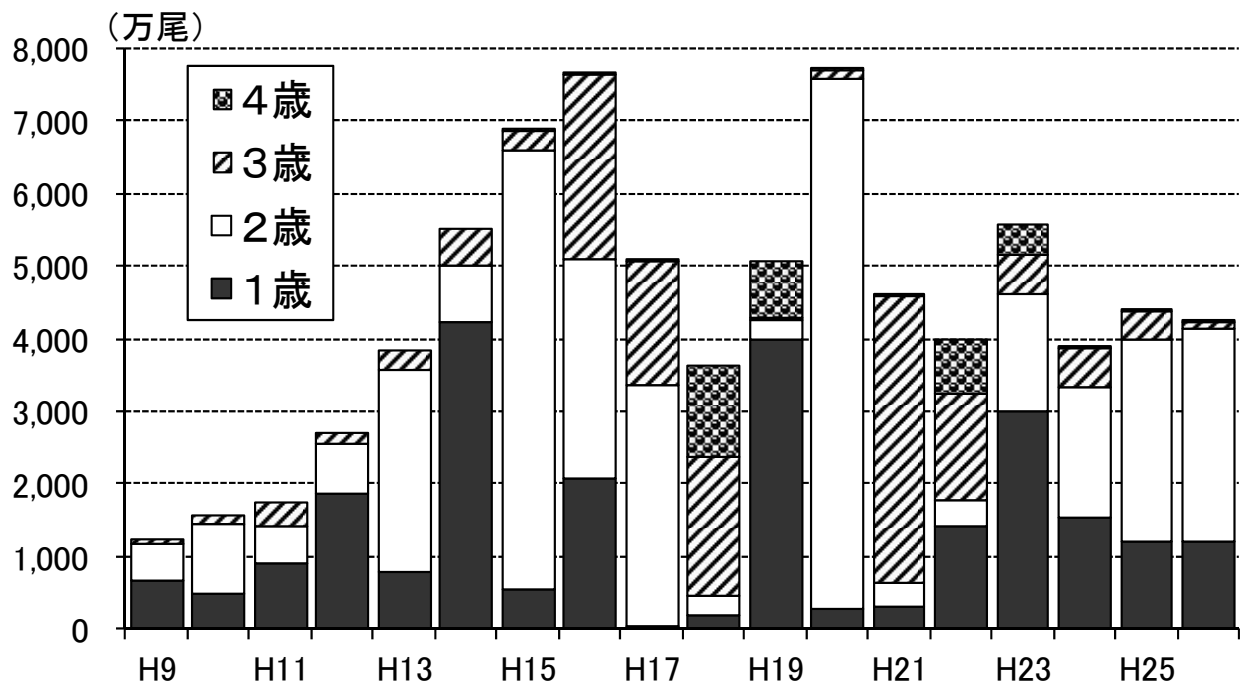


図3 日本海北部5県における年齢別漁獲尾数の推移 (水産振興センター調べ)

- ◎H26年漁期は、H24年生まれ(2歳)が最も多く、次いでH25年生まれ(1歳)が多く、3~4歳の割合は低かった。

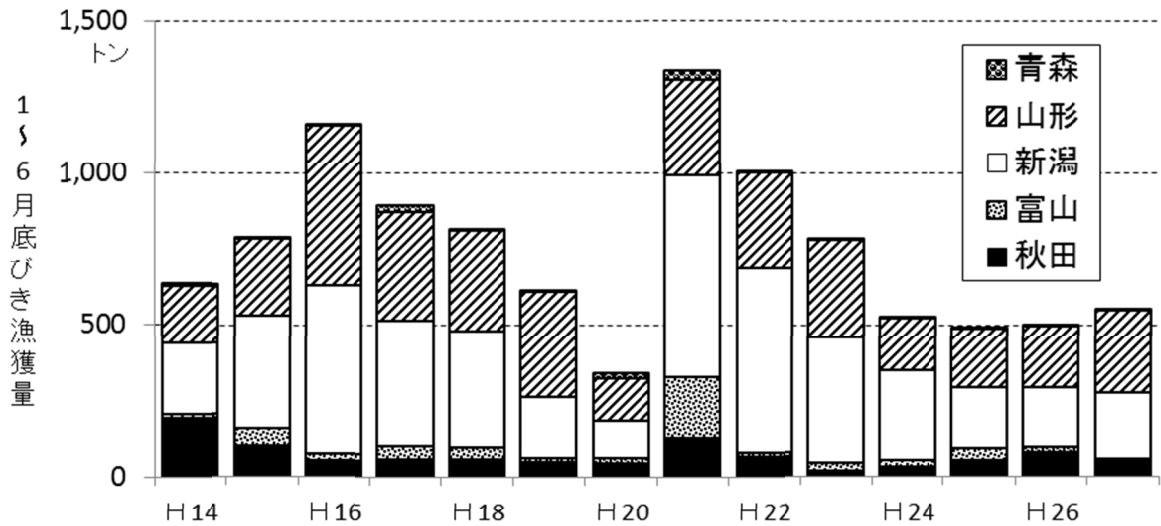


図4 1～6月における日本海北部5県のハタハタ漁獲量

(H26年まで日本海区水産研究所調べ、H27年は水産振興センター調べ)

◎本年1～6月の日本海北部5県の漁獲量は548トンで、前年の109%に増加した。各県の漁獲量は、富山11トン(前年比83%)、新潟217トン(110%)、山形272トン(134%)、秋田45トン(57%)、青森1トン(19%)で、新潟・山形では漁獲量がやや増加した。

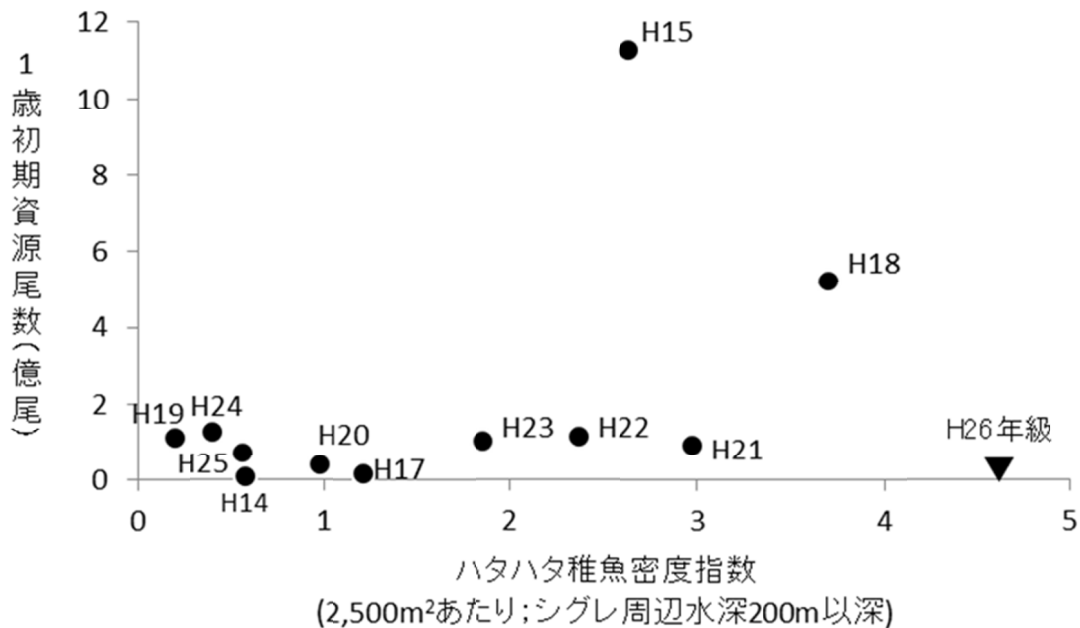


図5 4～8月におけるハタハタ稚魚の採集密度

◎これまで、秋田市沖の天然礁(シグレ)周辺海域での稚魚密度を指標として、翌年の1歳の尾数を推定してきた。しかし、この指標では資源を過大推定する可能性が考えられた。このため、今期の1歳資源予測では再生産成功率(親魚重量当たり1歳資源尾数)の平均値を用い、稚魚密度指数は参考値とした。

●底びき網での調査結果(成魚:11-12月)

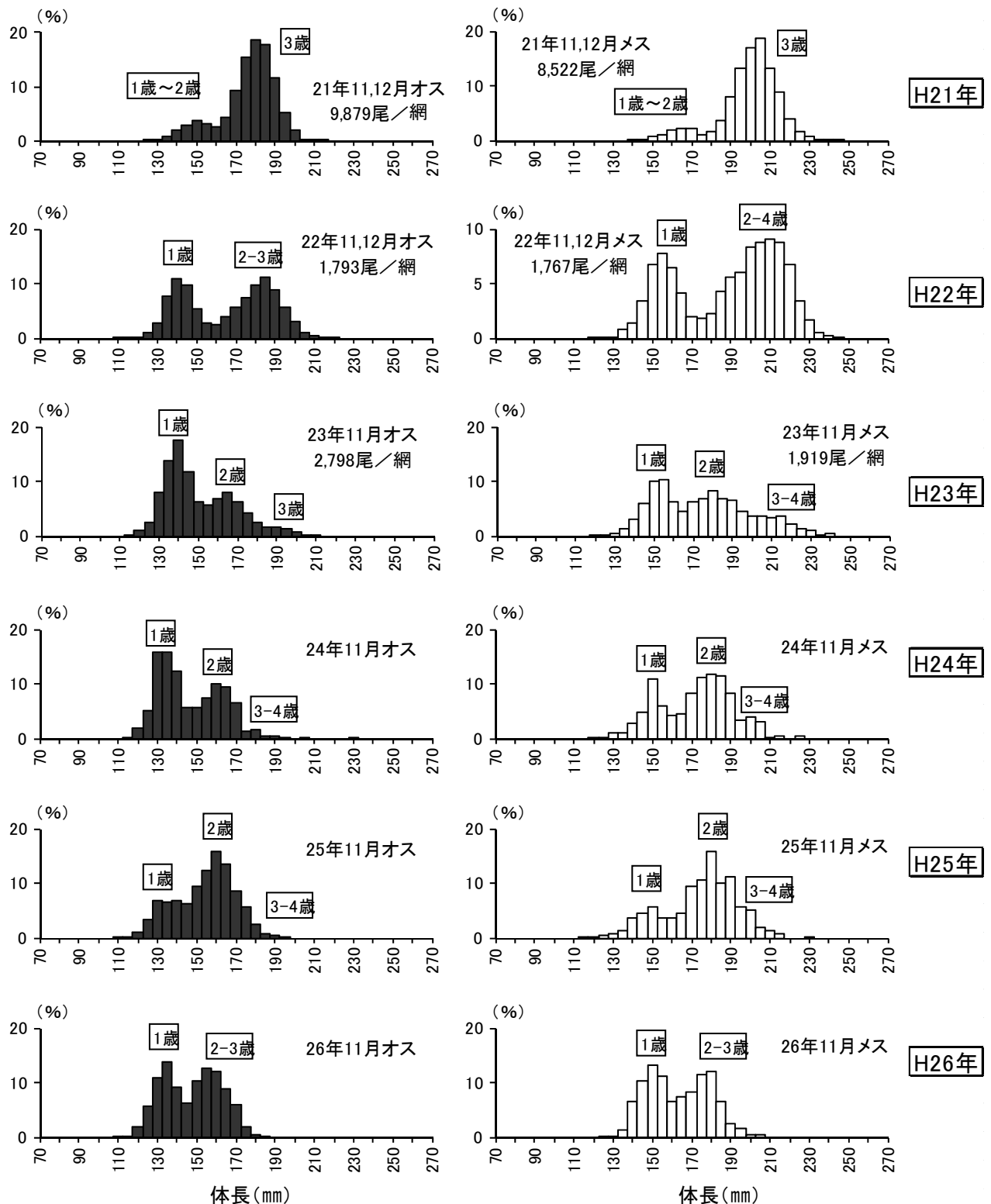


図6 11、12月におけるハタハタ体長組成 (千秋丸底びき網調査)

【昨年の傾向】

◎H25年生まれ(1歳)とH24年生まれ(2歳)が多かった。

◎H22、23年生まれ(3、4歳)の割合は低く、ここ数年は大型の割合が低下している。

●底びき網での調査結果(成魚:4-5月, 200m以浅)

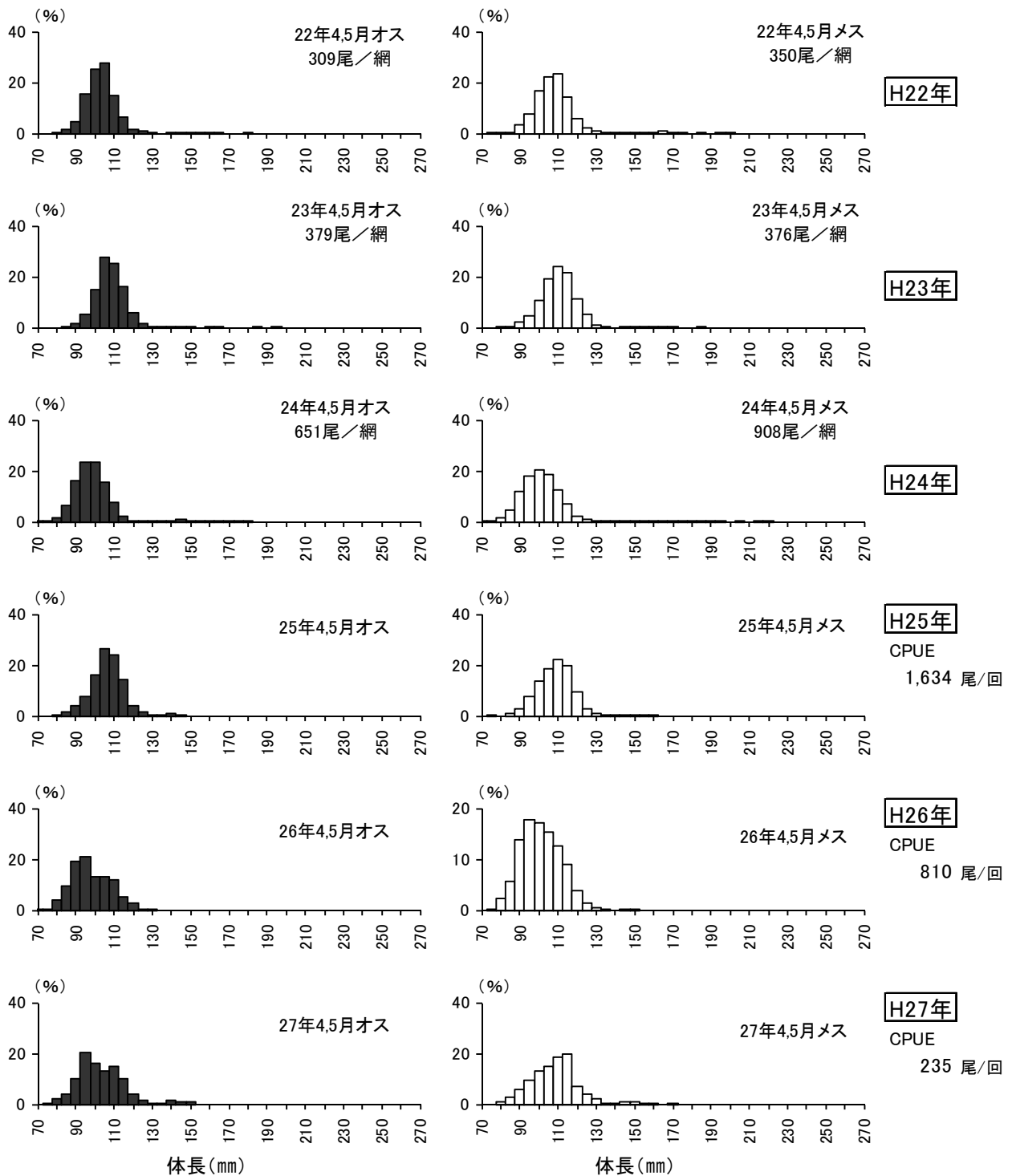


図7 4、5月におけるハタハタ体長組成(水深200m以浅)

(H24年まで第五代千秋丸、H25年以降は第六代千秋丸で実施)

【今年の傾向】

◎ここ数年の1歳の一網あたり漁獲量は大きく低下しているが、今春の調査回数が少ないため判断材料としない。

●底びき網での調査結果(成魚:4-5月, 250m以深)

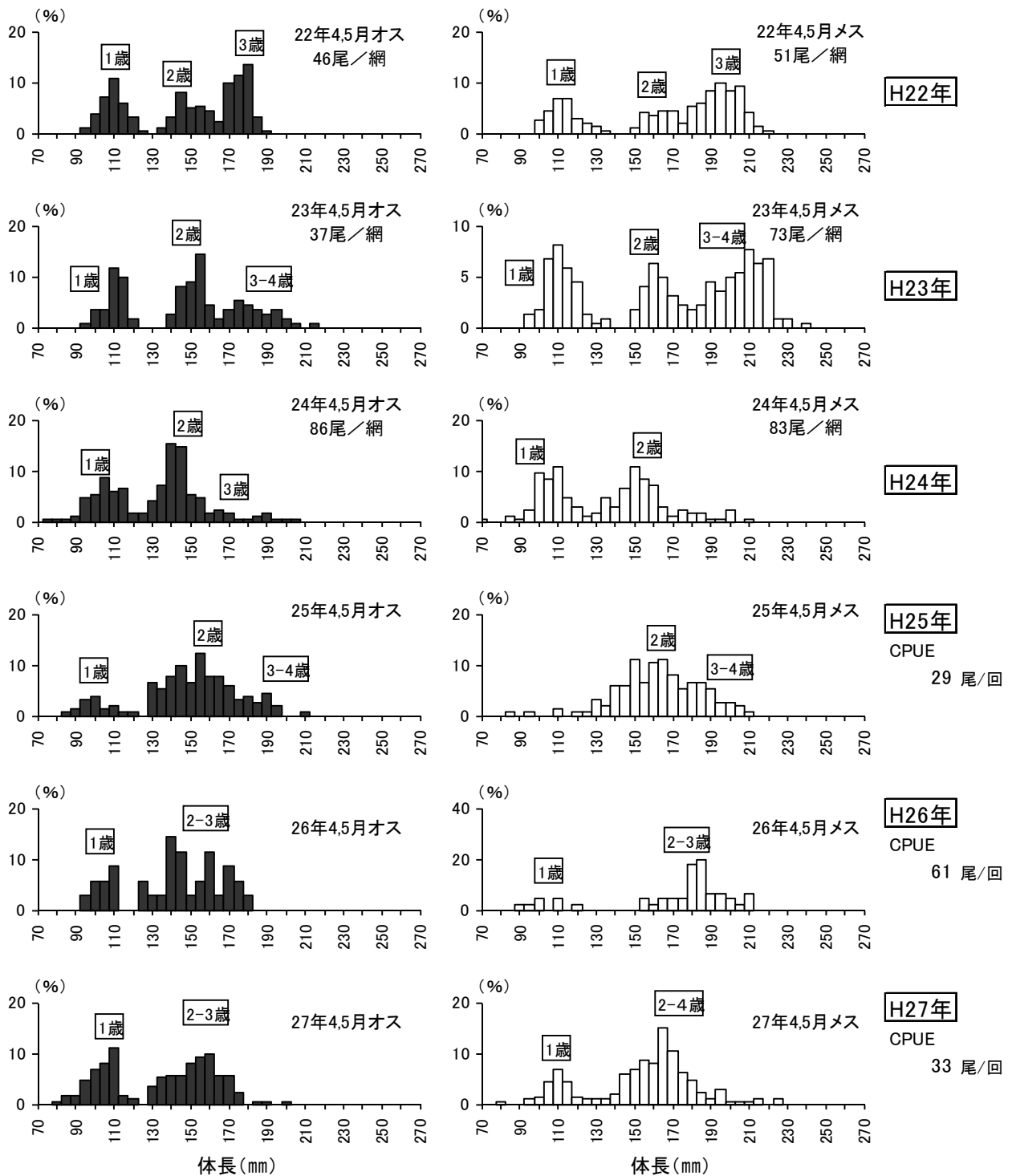


図8 4、5月におけるハタハタ体長組成(水深250m以深)

(H24年まで第五代千秋丸、H25年以降は第六代千秋丸で実施)

【今年の傾向】

◎H25年生まれ(2歳)とH24年生まれ(3歳)が中心であるが、H26年生まれ(1歳)の割合も比較的高かった。

●調査船での調査結果(成魚:9-10月)

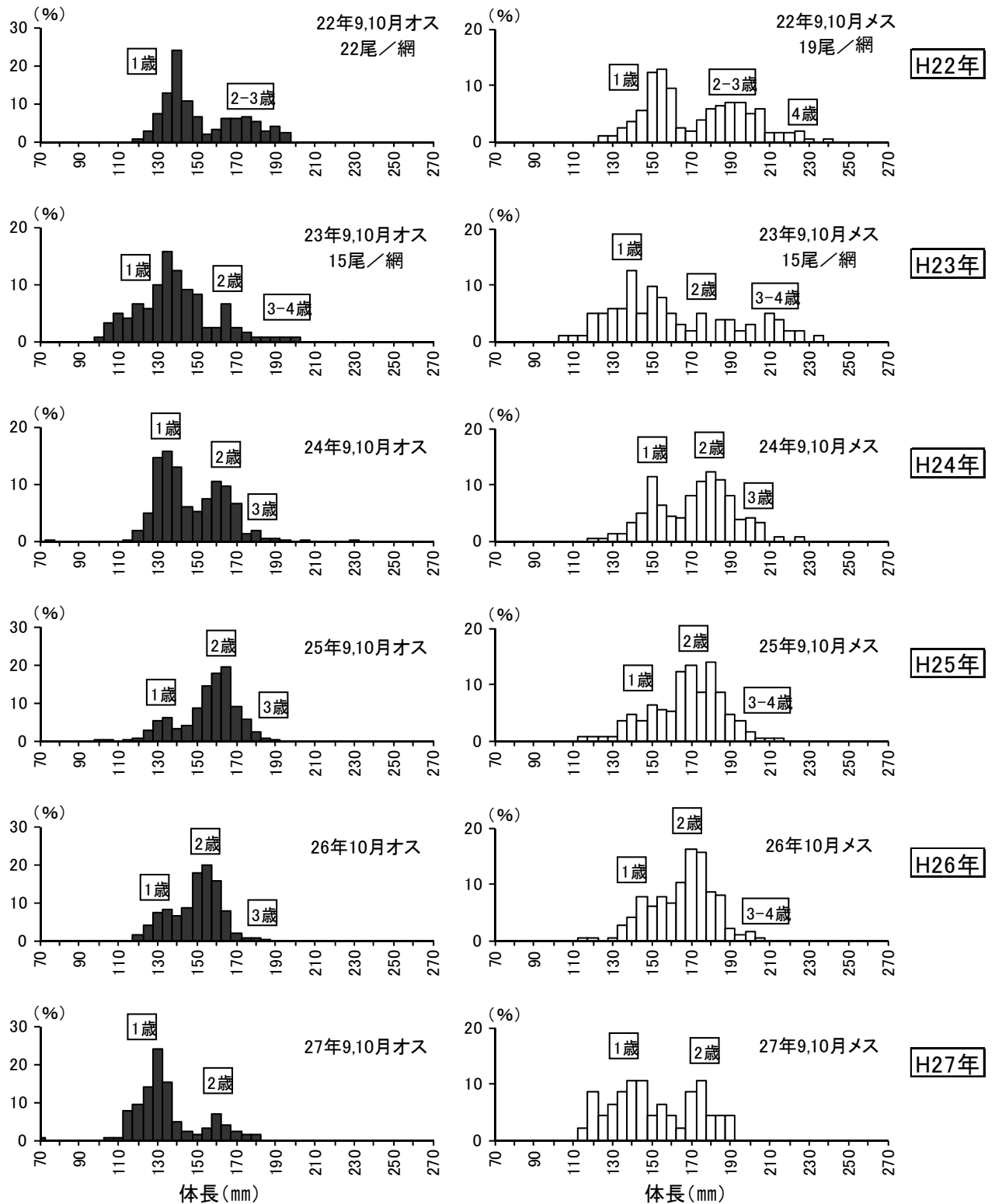


図9 9、10月におけるハタハタ体長組成

(H23年まで第五代千秋丸、H24年は用船調査、H25年以降は第六代千秋丸+民間船データ)

【今年の傾向】

◎H26年生まれ(1歳)の割合が最も高く、次いでH25年生まれ(2歳)が分布する。

◎3-4歳は少ない。

## H27年漁期のハタハタ漁獲対象資源量

◎ 1－2歳が中心で3歳も混じる。

→ 今漁期の魚体は、小・中型が主体。

◎ 解析の結果、秋田県の漁獲対象資源の尾数は 3,051 万尾、重量は約 2,000 トンと推定した。

〔提言〕

主に青森県から新潟県にかけて漁獲されている日本海北部系群の資源は低位減少傾向が続いていると考えられる。

割合が高いと予想される1歳魚は、来年以降の重要な漁獲対象資源である。小型魚の割合が特に高い場合は、漁場回避や網上げなどの保護措置が必要。

資源計算には正確な漁獲量が必要である。小型魚など価格の低いものは漁協を經由せず販売される例があり、これまで漁獲量に含めることができなかった。この量によっては漁獲量が設定枠を超過することから、漁獲物の流通管理体制の強化が必要。

限られた漁獲物を十分に活用するため、操業の効率化や漁獲物の取扱いなどによる価値の一層の向上が必要。